南郷晃子

編集長島田淳子、『翻訳文学紀行Ⅱ』、2020 年 9 月
担当箇所　「日本語（古文）文学」

『翻訳文学紀行』は日本でこれまであまり翻訳されてこなかった国の作品、そして誰も翻訳したことのない作品を扱う翻訳文学のアンソロジーである。現時点で翻訳家として十分な知名度を獲得していない者が翻訳をする点にも特色がある。
プロの翻訳家による、その気配を消すことに成功した作品の素晴しさは言うまでもない。だがそれとは異なり、本書からは、ときにそれぞれの訳者の翻訳行為をめぐる自問自答の気配が生々しく立ち現れる。ある言葉で表された作品を異なる言語体系のうちに再現しようとするとき、なにがより「正しい」方法なのだろう。作者の意図か、読者の理解か、文化の違いを意識させないことか、させることか。そういったせめぎあいの中から最適解を個々が選びとっていく。その瞬間に垣間見える逡巡が『翻訳文学紀行』の面白さでもあろう。読者は翻訳行為とは何かを不意に問いかけられるのである。
本書『翻訳文学紀行Ⅱ』は『翻訳文学紀行』の第二弾として出された。『翻訳文学紀行Ⅱ』においては、とりあげる言語、地域に加えて作品の様式も多彩であり、例えばルーマニアの作品である『カリフォルニア、ソメシュ川の畔で』（ルクサンドラ・チュセレアヌ著、阪本佳郎訳）は訳者阪本氏の師にあたる人物の詩である。ページをめくるとともに字体がめまぐるしく変わっていく点は非常に特徴的である。言葉が活字になれば、通常はその外見は一律になっていく。『カリフォルニア、ソメシュ川の畔で』の変化する字体は、活字化そのものへの抵抗であるかのようにもみえる。
また本書に収められる話はどこか怒りを内包するものが多い。作品の怒りを作者本人に紐付けるかどうかは留保がいるだろうが、「訳者あとがき」では内戦、スターリニズムの席巻、日本による植民地支配など、作品を取り巻く様々な受難が語られる。受難を伝えんとするいくつかの「訳者あとがき」からは、作者の怒りを自らの身体に受け入れ言葉にしようとした訳者の姿が、自然浮かび上がる。
以下本書におさめられる作品一覧を挙げる。
・『鳩は飛んでいく』メリンダ・ナジ・アボニィ著／飯島雄太郎訳（ドイツ語文学　ユーゴスラヴィア）
・『カリフォルニア、ソメシュ川の畔で』ルクサンドラ・チュセレアヌ著／阪本佳郎訳（ルーマニア語文学　ルーマニア）
・『古物哲学』李箕永著／影本剛訳（朝鮮語文学　朝鮮）
・『礦石集』蓮体編／南郷晃子訳（日本語（古文）文学　日本）
・『時はシバルバーにて明ける』ルイス・デ・リオン著／鋤柄史子訳（スペイン語文学　グアテマラ）
『翻訳文学紀行』は翻訳文学のためのひとつの試みであり、言葉をめぐる世界の枠組みに対する静かな異議申し立てでもある。しかしながら、本書のはじまりはあっけらかんと明るい。「パスポートは持っただろうか？」。それは結局のところ、このアンソロジーがなにより翻訳文学作品を読む喜びのための作品であることを示していよう。